

親鸞の語法「～の念仏（名号）」

「本願の名号は正定の業なり」（『正信念仏偈』204頁）

「弥陀の名号」（『浄土和讃』478頁 [5] 486頁）

「智慧の念仏」（『正像末和讃』[31] [34] 501頁）

## 第12願

(1) 法蔵菩薩の光明は、1. 国土人天（衆生）を浄土の諸仏として発見し、2. 国土人天から本来の自己を見失わせる無明を照らし出し、3. 国土人天を浄土の衆生として摂取する。

(2) 光明無量の願は（…）一切衆生を觀照して、そこに諸仏を発見せんとする智慧の形であり、寿命無量の願は、その觀照せる一切衆生を荷負して自己自身とせんとする慈悲の根である。言い換えれば、光明無量の願は、諸仏を発見せる願であり、寿命無量の願は、衆生を自己とせる願であろう。（大河内了悟／宮城顛『本願文』第12願、31頁）

(3) 光明無量ということはどこまでもものを尊敬してゆく働きである。第十二の願を読んでもみれば、諸仏の国を照さずんば正覚を取らじとということを書いてあります。諸仏の国を照さずんば正覚を取らじとすることは、**諸仏の国を見出さずんば正覚を取らじ**とことである。それはすなわち十方衆生のあるところを諸仏の国として觀照するということであり、（…）誠に十方衆生を助けたいという本願は、一方からいけば十方衆生の存在をみとめ、それを尊重されることに根拠するのであります。（金子大栄『大無量寿経講話』上、220頁）

(4) 光明は是れ無声の名号、名号は是れ有声の光明なり（若霖『文類聚鈔蹄涔記』）

(5) **十二光仏**の御ことのように、かきしるしてくだしまいらせそうろう。くわしくかきまいらせそうろうべきようもそうらわず。おろおろかきしるしてそうろう。詮ずるところは、**無碍光仏**ともうしまいらせそうろうことを**本**とせさせたまうべくそうろう。（『御消息集』[17]581頁）

(6) **無碍光仏**の御かたちは、**智慧**のひかりにてましますゆえに、この仏の智願海にすすめいれたまうなり。一切諸仏の智慧をあつめたまえる御かたちなり。**光明**は**智慧**なりとしるべしとなり（『唯信鈔文意』548頁）

(7) 「觀音勢至自来迎」というは、南無阿弥陀仏は**智慧**の**名号**なれば、この不可思議光仏の御なを信受して、憶念すれば、觀音・勢至は、かならずかげのかたちにそえるがごとくなり。この**無碍光仏**は、觀音とあらわれ、勢至としめす。（『唯信鈔文意』548頁）

(8) この弥陀の光明は、日月の光にすぐれたまふゆえに、超と申すなり。超は余のひかりにすぐれこえたまへりとしらせんとて、超日月光と申すなり。（『弥陀如来名号徳』）

## 不断煩惱得涅槃 / 煩惱をたちすてずして、無上大涅槃をさとる？

- (9) 涅槃 (nirvāṇa/nibbāna) nir: 否定の接頭辞 vāṇa: (Vā の過受分「吹く・吹きつける」)  
燃え盛る (煩惱) 漢訳: 泥洹、滅度。
- (10) 仏教における修行の究極目標 (...) 煩惱の火が吹き消された安らぎ、悟りの境地。  
(『岩波仏教辞典』項目「涅槃」)
- (11) 涅槃とは何か。煩惱の根本と言われる貪欲の滅、瞋恚の滅、愚痴の滅をいう (相応部經典)
- (12) 「凡<sup>1</sup>聖<sup>2</sup>逆<sup>3</sup>謗<sup>4</sup>齊 回入」というは、小聖<sup>2</sup>凡夫<sup>1</sup>五逆<sup>3</sup>謗法<sup>4</sup>無戒・闍提みな回心して、  
眞実信心海に帰入しぬれば、衆水の海にいらて、ひとつあじわいとなるがごとしとたとえたる  
なり。これを「如衆水入海一味」というなり。(『尊号眞像銘文』532頁)
- (13) 小聖 → 凡夫 → 五逆 → 謗法 → 闍提 (意識下の罪。無明)
- (14) 一闍提 (Icchantika) 欲求者、快樂主義者、現世主義者。極欲。社会や他者への無関心。
- (15) 如是等王 皆害其父 悉無一王 生愁惱者 (「信巻」序前の文 209頁)
- (16) 「齊」穀物の穂が出そろう姿。ひとしい、そろう。一齊、齊唱。

## 常照と常覆

- (17) 攝取心光常照護 已能雖破無明闇<sup>1</sup> 貪愛<sup>2</sup>瞋憎<sup>3</sup>之雲霧<sup>2,3</sup>  
常覆眞実信心天 譬如日光覆雲霧<sup>2,3</sup> 雲霧<sup>2,3</sup>之下明無闇<sup>1</sup>
- (18) 「攝取心光常照護」というは、信心をえたる人をば無碍光仏の心光、つねに  
たまうゆえに、無明のやみはれ、生死のながきよ、すでにあかつきになりぬとしるべしとなり。  
「已能雖破無明闇」というは、このころなり。信心をうればあかつきになるがごとしとしる  
べし。「貪愛瞋憎之雲霧 常覆眞実信心天」というは、われらが貪愛瞋憎をくもきりにたとえ  
て、つねに信心の天におおえるなりとしるべし。(『尊号眞像銘文』532頁)
- (19) 暁 → 東雲 → 曙
- (20) 弥陀仏の日、普く照耀す、すでによく無明の闇を破すといえども、  
貪愛・瞋嫌の雲霧、常に清浄信心の天に覆えり。(『浄土文類聚鈔』410頁)

- (21) 光に常照といひ、惑に常覆といふ (...) 常覆をもつてのゆえに常照す。  
(随慧『正信念仏偈講義説約』)
- (22) 無明は見えない。無明は貪欲と瞋恚として現象する。無明はそれ自体としては存在しない。  
貪欲と瞋恚において、無明を教えられる。 光明 → 貪愛・瞋憎（雲霧） < 無明
- (23) 貪愛・瞋憎も無明もともに煩惱であるが、無明は法相からは愚痴のことである。(…) 無明と貪・瞋は区別される。すなわち無明は、それ自身煩惱でありつつ、また一切煩惱の成り立つ場所である。瞋のあるときに貪はなく、貪の起こるときに瞋はない。白道において、水の出るときに火は退き、火の出るときに水は退く。貪愛・瞋憎は相応しない。ただし、無明は貪愛にも瞋憎にも相応する。無明が破られるということは、凡夫をして凡夫たらしめた根底が破れたことである。(安田理深『正信偈講義・第2巻』223頁)
- (24) 無明の三義 1. 煩惱の総称 2. 愚痴(三毒の煩惱のひとつ) 3. 疑無明(仏智不思議を疑うこと)
- (25) この無明について、真如法性に背反する愚痴(痴無明)のこととする説と、本願を疑い、本願にそむく疑惑(疑無明)のこととする説と、法の徳からいえば痴無明を破ることであり、機の心相からいえば疑無明を破ることをいうとする説とがある。親鸞聖人が本願疑惑を表すのに無明という言葉を用いられることがあるのは、真如法性にそむくことと、本願にそむくこととは、どちらも人間の虚妄分別を絶対視することからきていて、本質的には一つであるからである。(梯実円『聖典セミナー・教行信証・教行の巻』59頁)

## 二河譬

- (26) 譬えば、人ありて西に向かいて行かんと欲するに百千の里ならん、忽然として中路に「見れば(西本願寺本)」二つの河あり。「信巻」『散善義』219頁)
- (27) 二河の譬喩の中に、「白道四五寸」と言うは、「白道」とは、「白」の言は黒に対するなり。「白」は、すなわちこれ選択摂取の白業、往相回向の浄業なり。「黒」は、すなわちこれ無明煩惱の黒業、二乗・人天の雑善なり。「道」の言は、路に対せるなり。「道」は、すなわちこれ本願一実の直道、大般涅槃無上の大道なり。「路」は、すなわちこれ二乗・三乗・万善諸行の小路なり。「四五寸」と言うは、衆生の四大・五陰に喩うるなり。「信巻」御自釈・白道四五寸釈 235頁)
- (28) また西の岸の上に人ありて喚(ヨハウテ)うて言わく、「汝一心に正念にして直ちに來れ、我よく汝を護らん。すべて水火の難に墮せんことを畏れざれ」と。(…)あるいは行くこと一分二分するに、東の岸の群賊等喚(テ)うて言わく、「仁者回り來れ。この道嶮悪なり。過ぐることを得じ。必ず死せんこと疑わず。我等すべて悪心あってあい向うことなし」と。この人、喚(フ)う声を聞くといえどもまた回顧ず。「信巻」『散善義』220頁)